

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02511

研究課題名（和文）19 - 20世紀、英米作家の大西洋を越えた文学交流における多様な越境に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Attempts to Transcend Different Types of Boundaries in the Transatlantic Literary Exchange between Nineteenth- and Twentieth-Century British and American Writers

研究代表者

天野 みゆき（Amano, Miyuki）

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50258282

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円

研究成果の概要（和文）：19世紀イギリスを代表する作家シャーロット・ブロンテとジョージ・エリオット、そしてエリオットと20世紀前半に活躍したアメリカの作家イーディス・ウォートンの直接的、間接的文学交流に焦点を当て、そこに見出される自己という存在、活動領域、階級とジェンダー等を規定する境界を越えようとする試みと葛藤を明らかにした。それらが提示する問題は、現代の私たちが抱える問題でもあり、自身の可能性をいかに伸ばしていくか、また社会をいかに変革していくべきかについて重要な示唆を与える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イーディス・ウォートンは現在最も関心を集めている作家の一人であり、オックスフォード大学出版局から29巻の作品集出版の準備が進められている。世界の一般読者も対象にして、オンラインアクセスも可能な形態も整備予定である。

ウォートンについて注目されるのは多面性と国際性であり、これらはエリオットとの共通点でもあり、特に国際性についてはエリオットの考え方が重視されている。本研究はエリオットとウォートンの関連性を体系的に考察し、両作家の作品の現代的意義を明らかにする点において、最新の研究に寄与する。研究成果については、随時、授業や公開講座等にも活かし、今後も研究と成果発表を続けていく。

研究成果の概要（英文）： This study focused on both the direct and indirect literary exchanges between Charlotte Bronte and George Eliot, two nineteenth-century British writers, and Eliot and Edith Wharton, a twentieth-century writer, and analyzed the attempts to transcend the different types of boundaries.

The boundaries which these writers and their characters face include those which define one's own being, spheres of activity, social class, and gender. The problems and conflicts they suffer share many things in common with those we have today, and they give significant suggestions for our way to expand our capability, and approach and possibly reform modern society.

研究分野：19世紀イギリス小説を中心として、19世紀の文化と社会、小説と絵画、旅行記との関連性について研究

キーワード：ジョージ・エリオット シャーロット・ブロンテ イーディス・ウォートン 越境 ジェンダー 階級  
間テキスト性

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、旅行記研究、文学研究において、「越境」という概念の重要性とその多様性が認識され、特に、大西洋を越えた先にあるヨーロッパを志向するアメリカ人作家についての研究が活発に進められている。

(2) 本研究開始前までに、筆者は旅行記の歴史的発展、作家同士の、あるいは作品と社会とのネットワーク、および他ジャンルとの相互影響に注目して研究を行ってきた。特に、1880 年から 1940 年代は、今日我々が生きているグローバリゼーションの始まりであり、旅行記もグローバリゼーションとそれがもたらす文化と民族の混合に対する意識、西洋の近代文明に対する懸念を示していることが明らかになった。また、旅行記と小説が共有する関心とともに、小説の方が、複雑な問題提起を行っている場合が多いことも明らかになり、ジャンル間の越境に注目して両者についての研究を深める意義を見出した。

## 2. 研究の目的

19 世紀から 20 世紀 (前半) にかけて生じた、英米作家たちの大西洋を跨る文学の交流に注目し、そこに見出される多様な「越境」(空間的・時間的・思想的越境、ジャンル間の越境、自己の越境)のありようと、その歴史的意義について研究する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、英米作家の文学交流について、作家同士の直接的な交流以上に、小説や手紙、評論、旅行記等に見出される「間テクスト性」(あらゆるテキストが、その意味を可能とさせている一定量の知識や意味作用の実践などとの間に結ぶ様々な関係)を重視する。

(2) 主たる対象は、旅行記と小説 (あるいは詩) の両方を著した英米の作家とし、彼らの作品に見出される「越境」と、その歴史的意義を考察する。

## 4. 研究成果

(1) イギリスの作家シャーロット・ブロンテ (1816-55) の『ヴィレット』(1853)とジョージ・エリオット (1819-80) の『ダニエル・デロンダ』(1876) の関係性を明らかにした。

拙論のタイトルと概要を次に記す。

拙論「ジョージ・エリオット——『ダニエル・デロンダ』における恐怖と苦悩の劇的展開」(2019 年)

1853 年 2 月、『ヴィレット』の出版直後に、ジョージ・エリオットは友人への手紙において、この作品が持つ力を「超自然的な何か」だと述べた。

エリオットは、パートナーであり評論家でもあったジョージ・ヘンリー・ルイス (1817-78) とともに、シャーロット・ブロンテに強い関心を抱き、高く評価していた。ルイスがブロンテと手紙を交わして小説執筆について助言し、それに対して彼女が反発をあらわにしたことはよく知られている。むろん、エリオットはこの二人のやりとりを熟知していたであろう。エリオットは、ルイスとほぼ全ての研究と思想を共有しながら、自らの芸術論を形成し、小説を進化させていったのである。

このような直接的な関わりにとどまらず、ブロンテとエリオットの間には作品を通じての交流が長く続き、ブロンテの作品はエリオットの作品の発展に大きく寄与したのである。

本稿では、エリオットが『ヴィレット』のヒロイン、ルーシー・スノウをいかに意識して『ダニエル・デロンダ』(以下、『デロンダ』と略記)のグウェンドレン・ハーレスを創造しているかを中心に、両作品の関連性を探った。両者の秘められた恐怖と苦悩が劇的に明らかにされていく点、イメージが重要な役割を果たしている点に注目した。

ルーシーは学校行事の素人芝居で演じる役に即興で自分自身の感情を注ぎ込み、実生活では他者に対して表現できない感情を思う存分発散させる経験を通して、自己表現への強い欲求、特に「演劇表現・劇的表現 (dramatic expression)」に対する鋭い興味を自覚する。そして、大女優が演じるワシテ、悪魔と化したワシテに強烈に引きつけられる。このワシテが体現する憎悪の極限状態が、『デロンダ』のヒロイン、グウェンドレンの恐怖と結びつくことを指摘した。夫グランドコートに対する極限の「憎悪」と「殺害」願望ゆえの恐怖である。

エリオットがワシテをイメージしてグウェンドレンを創造したであろうことは、旧約聖書のワシテのエピソードからもうかがわれる。古代ペルシアの王妃ワシテは、酒宴でその美貌を披露せよという王の命令に背いたために追放された(「エステル記」第 1 章 9-22 節)。転落への恐怖がグウェンドレンに道を誤らせるのである。

さらに、ブロンテが1851年にロンドンで女優ラシェル（本名 エリサ・フェリックス、1820-58）の舞台を見た経験をワシテの場面に再現したことを考慮すると、ブロンテとルイス、エリオットの手紙と評論、小説を通しての文学交流が明らかになる。

ラシェルは貧しいユダヤ人の家庭に生まれながら、フランスのコメディ・フランセーズで17年間も支配的な力を握る地位まで上りつめた伝説的な女優である。ロマン主義の時代に17世紀のフランス古典主義演劇を復活させ、イギリスを始めロシアやアメリカなど海外にも進出した。女優ラシェルは、大衆紙や評論、詩、小説の言説によって様々な、相反する要素を象徴するイメージとして構築された。自らの階級、活動領域、国の境界線だけでなく、ジャンルの境界線をも超えた存在として大きな影響力を持ったのである。

1851年にブロンテがラシェルを観た後の4通の手紙を読むと、ラシェルが与えた衝撃や恐怖、興奮、不安が忠実かつ劇的に小説に描き出されていることがわかる。このようなブロンテの手紙および小説と、ルイスのラシェルについての評論に顕著な間テクスト性が見出される。ルイスの『俳優と演技について』（以下、『俳優と演技』と略記）は、1840年代から1860年代までに雑誌に寄稿した評論を一冊にまとめて1875年に出版したもので、同年に二版、1878年と1880年にはアメリカでも出版され、広く受け入れられたことがうかがわれる。ちょうど『デロンダ』出版（1876年）の前後の時期である。『俳優と演技』の第3章「ラシェル」において、ルイスはラシェルを「豹」のイメージでとらえ、それは『ヴィレット』の「牝虎」を連想させる。さらにブロンテは「蛇」のイメージを加え、しなやかに体や首をくねらせる「蛇」のイメージを、エリオットはグウェンドレンに与えるのである。

このように、ルイスとブロンテが構築したラシェル／ワシテ像が相互の連想によって強化され、そのイメージをエリオットが『デロンダ』で巧みに利用しているのである。

『デロンダ』は演劇に関わるイメージを駆使しながら、ヒロインの恐怖と苦悩を劇的に展開する。彼女は階級の境界線を越えるという野望を達成したが、罪の意識と絶望に苛まれる。しかし、そこから自らの生きる境界、すなわち他者との関係性について新たな認識を得ることで、自らの可能性を広げることができたと言える。

また、この作品は、芸術と演技、演技と感情の関係などの問題を提示しており、それは時宜にかなうテーマだった。1875年に見られたイギリス演劇の復活を確かなものにするために、ルイスは、優れた芸術家の育成だけでなく、演劇という芸術についての知識を備えた観客も育成する必要があると考えて、『俳優と演技』を出版した。このようなルイスの意図も『デロンダ』は含んでいると言える。

そして、読者に自らの思考、想像力の境界線を越えさせる試みが、この作品のエピグラフの使い方に見出される。エリオットが駆使するエピグラフは、登場人物たちの比較、あるいは本作と他の作品との比較を通して、読者の内なる対話、印象の解釈を促すのである。読者しだいで無限に広がりゆく小説世界の構築を目指したエリオットの大胆な試みと言える。

(2) ジョージ・エリオットとアメリカの作家イーディス・ウォートン（1862-1937）の作品の関係性を明らかにした。

拙論 Edith Wharton's Response to George Eliot's *Adam Bede*: Sympathy and Charity in *Summer* (2021年)

イーディス・ウォートンは小説『エイジ・オブ・イノセンス』（1920）により女性として初めてピューリツァー賞を受賞した。彼女は19世紀と20世紀をほぼ同期間生き、アメリカの代表的な作家であると同時に、イギリスとフランスに家を持つ旅人でもあった。

ウォートンは生涯ジョージ・エリオットに対して関心と敬意を抱き、ジョージ・ヘンリー・ルイスの哲学に関する著作にも興味を持っていた。ウォートンの『歓楽の家』（1905）と『決断の谷』（1902）が、それぞれエリオットの『ダニエル・デロンダ』（1876）『ロモラ』（1863）と類似性を有する点は論じられてきたが、両作家の作品の関係性を明らかにするには、体系的に間テクスト性を考察する必要がある。

本論では、まずウォートンのエリオットに対する評価を確認した上で、エリオットの『アダム・ビード』（1859）とウォートンの『夏』（1917）の間テクスト性を明らかにした。

ウォートンは10代の頃からエリオットの作品を読み、高く評価していたが、小説家としてのウォートンのエリオットに対する評価は、レズリー・スティーブンス著『ジョージ・エリオット』（1902）の書評に明確に述べられている。この書評はウォートンが最初の長編小説『決断の谷』を出版した年に発表したものである。ウォートンは当時のエリオットに対する評価を概ね認めているが、注目すべき主張が二点ある。

第一点は、科学的研究がエリオットの想像力に悪影響を与え、ジョージ・ヘンリー・ルイスが彼女の発展を阻んだという当時広く認められていた考えに、ウォートンが異議申し立てをしたことである。

第二点は、ルイスとの個人的な関係、すなわち、離婚がかなわぬ妻子ある男性との内縁関係によって世間からの隔離を余儀なくされたことが、エリオットの小説家としての主要な欠点につながったという主張である。ウォートンによれば、この欠点とは、「バランスのとれた視点、展望 (perspective)」を失ったことである。世間から隔離されたことで、エリオットは

無意識のうちに自らの小説を「自身が選んだ道を擁護するためではなく、自分が違反したように見える法律に忠実に従っていることを主張する手段」にしているため、社会を描く小説家にとって重要、かつ自然な着想源と視点、展望を失ってしまったのだと、ウォートンは論じる。

このようにウォートンが指摘した視点と展望の喪失は、エリオットの小説においてヒロイン達の将来と社会における立場が多くの場合、曖昧で不確かなものとしてしか提示されていないことに関連していると言える。ウォートンは、自身の小説の中で、社会に生きる者たちについての展望をより明確に示そうとするのである。

ウォートンの『夏』が「代償を払う女性」と「非嫡出子」の伝統の中に位置づけられることは、彼女自身意識していた。特にエリオットの『アダム・ビード』とは、ヒロインの性質と物語の展開の類似性が顕著で興味深い。両作品のヒロイン達は、結婚により階級の境界を超えて社会的に上昇することを目指す、男性に裏切られて絶望する。ただし、両者は階級意識とそれゆえの劣等感、自己認識の深さ、精神的成長の度合いにおいて大きく異なる。

ウォートンは、『夏』のチャリティ・ロイヤルを次のような女性として提示することでエリオットの『アダム・ビード』を発展させている。チャリティは苦境の中でも、自分の選択とその結果を責任感とともに受け入れ、自分の生き方を決めた。彼女は将来心理的葛藤に苦しむかもしれないが、子供のために社会的に安全な場所を確保したことには自信をもち、それが彼女を支えるだろう。また、彼女は心の中に誰にも侵されることのない領域を確保した。これらのことにより、彼女は自身を規定する社会及び他者との境界線を押し広げて、自らの能力と可能性を高めると同時に、その境界線を強固なものにしたのである。

ウォートンの『エイジ・オブ・イノセンス』(1920)における登場人物たちのコスモポリタニズム、現実認識と現実逃避、道徳意識に焦点を当てながら、エリオットの作品『ミドルマーチ』(1871-72)、『フロス河の水車場』(1864)との間テクスト性についての研究を進めた。

ウォートンの旅行記が彼女自身にとってどのような意味を持ち、旅行記というジャンルにどのような貢献をしたのかに注目して研究を進めた。対象としたのは、『イタリアの背景』(1905)、『フランス自動車旅行』(1908)、『モロッコにて』(1920)である。アメリカ人上流階級のウォートンは、階級的、人種的特権を有しており、それが旅行記に重要な影響を与えているが、旅行中に女性であるが故の差別も経験している。従来受動的な存在、旅行者だとされていた女性が、自らの境界と限界を越えて新たな領域に進出できることを示しながら、ウォートンは女性の可能性を広げるとともに、旅行記というジャンルの発展にも貢献しているのである。

ウォートンの旅行記とエリオットの旅行記を比較し、それぞれの特徴についての考察を進めた。

上記 については、現在論文を準備している。

イーディス・ウォートンは現在最も関心を集めている作家の一人であり、オックスフォード大学出版社から29巻の作品集出版の準備が進められている。世界の一般読者も対象にして、オンラインアクセスも可能な形態も整備予定である。

ウォートンについて注目されるのは多面性と国際性であり、これらはエリオットとの共通点でもあり、特に国際性についてはエリオットの考え方が重視されている。本研究はエリオットとウォートンの関連性を体系的に考察し、両作家の作品の現代的意義を明らかにする点において、最新の研究に寄与する。研究成果については、随時、授業や公開講座等にも活かし、今後も研究と成果発表を続けていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Miyuki Amano	4. 巻 16
2. 論文標題 Edith Wharton's Response to George Eliot's Adam Bede: Sympathy and Charity in Summer	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 県立広島大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 21 - 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩上はる子、惣谷美智子編著（第4章を執筆 天野みゆき）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 18
3. 書名 『めぐり会うテキストたちーブロンテ文学の遺産と影響』の第4章(ジョージ・エリオットー『ダニ エル・デロンダ』における恐怖と苦悩の劇的展開ー『ヴィレット』を発展させた物語)65-82頁	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------